

## 日本労働年鑑 第26集 1954年版

The Labour Year Book of Japan 1954

## 第一部 労働者状態

## 第五編 労働者の生活

## 第二章 栄養

## 第二節 農民の栄養状態

「農家経済調査」(農林省統計調査部)の一環として行われている農民栄養摂取量調査の結果は、一九五一年四月より引きつずき発表されているが(「農民栄養調査月報」農林省統計調査部)、つぎに五二年一月より一月までの期間における集計結果にもとずき栄養摂取状況を記述する。なお、この調査方法は、一九五〇年の世界農業センサスにもとずき、階層別任意抽出法により選定された全国五八六町村五八〇二戸の農家を対象とし、この農家が購入および自給した飲食物の数量と価額を記帳させて調査し、これを農区別に累計して一戸当り平均を算出したものに、食品別の栄養価を乗じて栄養摂取量を計算したものである。また飲食物の数量と価額の調査は、農家経済調査物財統計として実施されているものの一部であつて、数量は農家が現金または現物をもつて購入したものと、自家生産物で家計に仕向けたものの数量、価額は現金購入のものは実際支払価額、物々交換のものは受取現物の市価、自給のものは販売価格によつて評価されている。栄養の計算には国民食糧及び栄養対策審議会決定の「日本食品標準栄養成分表」によつて作成された「農家の食品別単位当栄養成分法」(統計調査部経済調査課作成)が用いられている。

第168表は全国平均一人当り農民の栄養摂取量を示すものであるが、まず月別に蛋白質摂取量をみると、農閑期の一月は七〇グラムで、この期間を通じて摂取量は最高であるが、三月には五九グラムと最低に落ち、六月の田植期には六九・八五グラムに増加し、それ以後はふたたび下降傾向をとつている。この一か月の平均は六五・二二グラムであるが、これは前記の審議会の決定した日本人標準蛋白必要量七五グラムになお一〇グラム不足している。また蛋白質のうち動物性蛋白質は、やはり六月の農繁期にもつとも多く一〇・七グラム摂取されているが、平均して八・八グラムで、蛋白質総量に対する比率はきわめて低く(一三%前後)、都市生活者におけるそれにくらべ、農民の蛋白摂取が主として穀類・豆類に依存していることを示している。脂肪は毎月一三グラムから一五グラムの間を前後し、平均一四・五九グラムであるが、これも標準必要量二五グラムに比較すると、なお著しい低さをしめしている。

最後に熱量であるが、一二月の二五三一カロリーを最高に、三月が最低二二七一カロリーで、平均二三七八カロリーとなつている。これは前年度の最高二七二七カロリー(一二月)、最低二二五〇カロリー(五月)、平均二四二三カロリー(四月からの九か月平均)にくらべると、今年度は熱量摂取が若干低下したことになる。

つぎに、この熱量源として、どの程度を穀類に依存しているかを見ると、毎月大体八二、三%を澱粉性食物たる主食穀物によつており、田植期の六月などは八三%を超えている。日本人としては、この澱粉性食物への依存度八〇%以下というのが望ましいとされているが、農民のばあいは、この

標準率をはるかに超えて熱量源を主食たる米麦にたよっている。この米麦の「過食」は、脂肪分の不足とともに、農民の健康状態を悪化する大きな原因となっている。さらにまた、この偏よつた栄養摂取に伴う米麦の消費量は一人平均四合という公定保有米量をはるかに上廻るものであり、この公定保有米を限度とする供出制がいかに農民にとって不利な、したがって納得しがたいものであるかを物語っている。

日本労働年鑑 第26集 1954年版

発行 1953年11月20日

編著 法政大学大原社会問題研究所

発行所 時事通信社

\*\*\*\*年\*\*月\*\*日公開開始

---

■ ←前のページ 日本労働年鑑 1954年版(第26集)【目次】 次のページ → ■  
日本労働年鑑【総合案内】

---

法政大学大原社会問題研究所(<http://oisr.org>)

---